

美術専攻 日本画研究領域

イシイ サエ

石井 沙英



やさしい走馬灯

水干絵具、岩絵具、和紙

やさしい走馬灯

「物語」は、人が生まれてから死ぬまでの間に存在する出来事そのものであり、死に際の走馬灯はその象徴である。私は、自身を含めた全ての人の走馬灯を構成する断片として風景を見ている。これまで何気ない場所に惹かれて風景画を描き続けてきた。それは、どのような風景であっても誰かの記憶に深く刻まれていて、走馬灯の一要素となり得ると考えているからである。

これまで、生を肯定するために風景を表現してきた。例えば、人々が行き交う駅や公園では、それぞれの人にとっての記憶が作られる。だから誰かの人生の一部として息づく日々の風景には、様々な記憶が絡み合っていると感じる。その中には、人々が抱いた小さな願いも積み重なっており、私はそうした思いが滲む風景に心動かされる。何気ない風景が、誰かの人生にそっと寄り添っているように感じられ、それらを描くことが生を肯定することに繋がると考えられるからだ。

本作《やさしい走馬灯》は、ある夏の日の風景を構成して描いた作品である。苦しい時期を過ごしていたある日、友人と海で手持ち花火をした。闇のように暗い海に放たれる花火の光が眩しくて、希望のように感じられた。行き帰りの道には七夕飾りが揺れ、海辺の街全体が淡い祈りに包まれていた。その光景をもとに、手持ち花火の光を命の象徴とし、短冊を人々の祈りの記録として描いた。花火の持ち主は私自身であり、同時に鑑賞者でもある。人は他者の祈りや希望に触れながら火花を散らして生き、やがて静かに命を終える。一日を悔いなく終えることの積み重ねが、美しい走馬灯を、ひいては物語を形づくることに繋がるのではないだろうか。

私はこれからも、沢山の風景に内包された人々の願いや記憶を見つめて、その場所に宿る「物語」を描いていきたい。日々の生活の中で生まれた光景がいつか誰かの走馬灯の一部になるかもしれないという思いを抱きながら、自身の目を見た風景を大切に制作を続けていく。